



Title	会話における可能構文の格交替について
Author(s)	李, 娜
Citation	国語国文研究, 157, 56(17)-46(27)
Issue Date	2021-08-19
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/88888">http://hdl.handle.net/2115/88888</a>
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_157_56(17)-46(27).pdf



[Instructions for use](#)

# 会話における可能構文の 格交替について

李 娜

## 1. はじめに

可能構文に「ガ-ガ」「ガ-ヲ」「ニ-ガ」の3つの格パターンがあることは、従来から指摘されてきた。文という単位から見れば、これらの格パターンは文法的に成立している。しかし、実際の会話使用において、この3つの格パターンは任意的に選択でき、かつ自由に交替<sup>1</sup>可能な状態にあるわけではない。例えば、「フランス語を話せる人がいますか」のような疑問文に対して、「太郎がフランス語を話せますよ」は成立するが、「太郎がフランス語が話せます」または「太郎にフランス語が話せます」は成立しにくい<sup>2</sup>。この発話において、質問を発する話し手にとって「太郎」は未知の新情報であり、焦点として解釈されやすい。すなわち、ガ格は太郎という情報のステータスを標示している。可能構文の3つの格パターンは交替可能であれば、同一の動作主を標示するニ格はガ格と類似する機能、つまり情報のステータスを標示するという用法も有していると考えられる。また、焦点は動作主のみならず、動作対象もなり得るため、動作対象を標示するガ格やヲ格は情報のステータスに関する機能を持つか否かについて議論する余地がある。

従来の研究は、「ガ-ガ」「ガ-ヲ」「ニ-ガ」の3つの格パターンの存在を指摘することに留まっており、各パターンはどのような状況において使用されているか、またはどのような状況で格交替が起るかについて詳しく議論されていない。本稿は、可能構文の格パターンが情報のステータスを標示する機能に着目し、格パターンの使用特徴を明らかにすることを試みる。

---

<sup>1</sup> 本稿では、格交替とは3つの格パターンの間における交替である。

<sup>2</sup> 「フランス語を話せる人がいますか」という質問に対して、「太郎がフランス語が話せます」と「太郎にフランス語が話せます」ともに自然な回答と言えないが、同程度の自然さではない。前者はそれほど不自然ではなく、後者は通常の平叙文では使われない。

## 2. 先行研究

可能構文はこれまでに、意味用法及び各用法間の関係が盛んに議論されてきた。意味用法については、主に能力可能と状況可能に大きく分けられている。また、「ラレル」形に着目し、「受動」「尊敬」「自発」の間の関係を通時的に考察するものもある。しかし、格交替の問題について詳しく議論したものは多くない。

渋谷 (1993) は、現代日本語の可能構文が持っている「ガ-ガ」「ガ-ヲ」「ニ-ガ」の3つの格パターンについて、統語論的、意味論的、談話的な観点から「表層格による一般的制約」「動作主性との相関」「可能の意味タイプとの相関」「述語動詞との距離」「言語運用レベルにおける談話的制約」の5つの支配条件を挙げている。例は次の通りである (渋谷 1993: 44-47)。

- (1) 表層格による一般的制約： \* [太郎に英語の本を読める] こと。
- (2) 動作主性との相関： 太郎は自然に (すらすらと とめどなく) 詩が / ? ? ? を書ける。
- (3) 可能の意味タイプとの相関： a 僕にはそんなばかな手紙は書けない。  
b 仕事があるから、僕には書けないけど、彼なら / ? ? 彼になら書けるかもしれない
- (4) 述語動詞との距離： a \* 英語の本が昨日ここに越して来た友達に読めるんだ。  
b 英語の本を昨日ここに越して来た友達に読めるんだ。
- (5) 言語運用上の制約： [太郎は本を] 書けるかもしれない。

渋谷 (1993) において表層格による一般的制約には、主に柴谷 (1978) による「文は少なくとも1つの主格「ガ」格名詞節を含んでいなければならない」という主格保持の原則と「同一文中には同じ表層格の名詞句が現れにくい」という制約がある。そして、動作対象がガ格で標示される場合は、ヲ格で標示されるものに比べて自発的な意味を表しているように、動作主としての役割 (動作主性) が相対的に格パターンを制約する。また、可能の意味タイプの影響について、心情・能力のありかを対比的にあるいは明示的に示そうとする場合には、動作主体を表示するのにニ格を用いる方が自然であるとしている。ただし、外的条件可能の場合でも、動作主体が対比される場合には、ニ格による表示はやや自然になる。続いて、基本的に動作対象のヲ格の使用制約は、述語動詞との距離によって影響されるという。最後に言語運用レベルにおける談話的制約というのは、可能構文の可能パターンは、その発話 (部分) がよく練られた上でなされたものか、それともよく練られぬままになされたものかによって左右される点である。例えば、(5) では「太郎は本を書くだろう」と言うつもりで、「太郎ハ本ヲ」と言ったあと、最初の意図を変更して「書ける」と続ける場合には、ヲ格が選択されるわけである。

この五つの条件は、格パターンの全体に関する制約条件というより、動作主体と動

作対象を標示する格助詞の選択条件となるであろう。さらに、議論の中に挙げていた例において、「ハ」や「ニハ」も用いられた。「ハ」は対比や主題標示など情報構造上の機能を持っているため、格パターンの選択に影響があると思われる。このように、「ハ」が関与しない格パターンの使用について、さらなる詳しい考察が必要である。

また、日本語において、可能構文を含む状態性を表す構文には対象を標示するガ格とヲ格との交替が見られる。そして、対象標示であるガ格と共起できる動作主体の標示にガ格やニ格がある。久野（1973：51）は、「主語ガ+目的語ガ」→「主語ニ+目的語ガ」の変換を受け得るか否かは全く各単語固有の特質によるものであって、意味の上から推定することはできないと説明している（例（6））。さらに、（7）で示しているように、目的語が動詞語幹だけの目的語と解釈されれば、ヲ格が現れ、状態を表す動詞形の目的語と解釈されれば、ガ格が現れると主張している。

- (6) a. 誰が英語が上手ですか。                      b. \*誰に英語が上手ですか。  
(7) a. (コノ歌+ (を) 歌ウ) +レル                b. (コノ歌) + (ガ) (歌ウ+レル)

青木（2008）は、他動性の要因から可能構文の対象格標示「ガ」「ヲ」の交替に関わる制約を考察した結果、有意志性、動性、アスペクト的特徴において高い他動性を示す場合、状態述語文である可能構文でもヲ格と共起するようになると指摘している。

これらの先行研究は、可能構文の格パターンの使用について多様な角度から議論されてきた。しかしながら、これまでに、可能構文は文を単位として分析されたことが多く、実際の会話において可能構文の格交替はどのように行なっているのか、またはなぜそのような現象が起きたのかについて検討する余地がある。さらに、格パターン全体の使用条件と、「ガ格」「ニ格」「ヲ格」の各自の用法とどのような関係があるのかを整理する必要がある。

本稿ではこの2つの問題点を踏まえて、「ガ格」「ニ格」「ヲ格」に関するそれぞれ本来の用法を考慮した上で、会話における可能構文の格交替の使用特徴を解明することを試みる。

### 3. 「ガ格」「ニ格」「ヲ格」の用法

本節ではまず「ガ格」「ニ格」「ヲ格」の用法を確認する。ガ格は一般的に主格標示として知られている。久野（1973）は、ガ格について、「中立叙述」「総記」<sup>3</sup>の用法が

---

<sup>3</sup> 久野（1973）は、「ガ格」について「中立叙述」「総記」の他「目的語標示」という用法も論じていた。加藤（2016：47）が指摘しているように、「中立叙述」「総記」は情報構造に関する区分であり、「目的語標示」は意味役割に関する区分であるため、それらを一緒にして記述するのは問題がある。本稿では、情報構造の観点から議論するであり、「中立叙述」「総記」のみを参考する。

あると述べている。そのうち、中立叙述のガ格は、述部が動作を表すか、存在を表すか、一時的な状態を表す場合に限られており、述部が恒常の状態、習慣的動作を表す場合には、総記の解釈しか受け得ないと指摘している。このように、総記のガ格は属性の持ち主を標示するものの、「X だけが」という意味であるため、文脈に伴わない文に出現すると不自然となる。そして、中立叙述という用法は、総記の「排他的」な特徴に対するものである。しかし、排他的でない用法とは具体的に何を指しているのだろうか。尾上(2004: 9-20)は、ガ格項を事態認識の中核項目<sup>4</sup>としている。例えば、「猫がちくわを食べている」と言うとき、「猫」は語られる事態の中の中核項目であり、言語主体は「猫」に着目して、つまり猫はどう有るか、猫は何をしていると見て、その事態を認識する。整理してみると、主格標示というのは意味的に行為の主体を表す用法であり、総記及び認識の中核というのは情報構造上の用法だと考える。そのうち総記という用法は、会話の意味的な焦点になりやすく、事態認識の中核は発話者の認識状態を反映している。

そして、二格について、日本語記述文法研究会(2009)は、主体、対象、相手、場所、着点、起因、時などの多様な用法を提示している。可能構文における二格は、主に能力の主体を標示するものである。例えば、次の例(8)である。

(8) この子に専門書が読めるはずがない。(日本語記述文法研究会 2009: 35)

(9) 仕事があるから、僕には書けないけど彼なら書けるかもしれない。

(渋谷 1993: 45)

上で言及している渋谷(1993)は、能力・心情または外的な条件を表す場合において、動作主が対比とされる際に二格を用いるほうが自然であると述べている。(9)はその例である。では、動作主体を標示する二格と対比との関係を確認する。(8)は、「この子にとって専門書を読むのが難しいあるいは、理解する能力がないため、読むことができない」という意味に解釈ができる。つまり、専門書を読む能力とは単純にあるかないかに分けるものではなく、尺度があるものである。専門書の読者として、当然のことながら、ある程度の能力が要求される。このように例(8)は潜在的に、他の読者との対比が生じるわけである。また、ここにある二格は「にとつて」と入れ替え

---

<sup>4</sup> 尾上(2004)では、狭義の事態認識の中核項目と事態認識における着目点の両方を事態認識の中核項目としている。狭義の事態認識の中核項目は本文で挙げている「猫がちくわを食べている」のようなものである。このような狭義の事態認識の中核項目と事態認識における着目点と必ず一致するわけではない。いくつか一致しないケースのうち、「太郎は納豆が食べられる」のような可能構文がある。この可能構文では事態生起の場が着目点であり、事態認識の中核項目となっている。本稿は、格助詞を中心として議論するものであるため、このような題目語を含む二重主語文に関する問題を今後の課題にする。

ることが可能であろう。(9)において、動作主に二人が存在することは対比の意を明確にしていることで、二格が適用となっている。(8)と(9)のような事態において、動作対象は唯一のものであるが、動作主は一人に限らない。したがって、動作主体の集合というものが存在し得るため、ある集合の中のものを標示する二格が選択される。

最後に、ヲ格を確認しておく。可能構文におけるヲ格は大きく動作対象の標示と経過域の標示の二つの種類に分けることができる。これまでに、ヲ格について、「ニ-ヲ」パターンの不適格が指摘されることがあるが、ガ格のように注目を集めていない。

#### 4. 情報構造について

ガ格は上述したように、焦点の標示及び発話者の認識反映という機能を持っている。また、二格は対比の用法を持っているため、情報構造上の焦点になりやすいという性質がある。このように、可能構文の格交替は、ガ格や二格がそれぞれ有している情報構造の特徴に影響される可能性がある。この問題を解決するには、焦点など情報構造に関する定義を確認する必要がある。

文法論において、文は「前提+焦点」に構成されていると扱われている。そのうち、前提は既知の旧情報であり、焦点は未知の新情報である(加藤 2016:50-51)。しかし、文における焦点は文の一部であるが、文脈を伴わない会話に出現するのは考えにくい。例えば、いわゆる総記のガ格は焦点の標示として解釈される場合が多いが、この解釈の獲得は、先行する発話が不可欠である。Lambrecht (1994)は先行する疑問文によって得られた焦点を「Predicate-focus」と呼んでいる。「Predicate-focus」の他、「Argument-focus」「Sentence-focus」という2種類の焦点を挙げている。「Predicate-focus」は既出のトピックについて陳述し、「Argument-focus」は指示物の特定であり、「Sentence-focus」は事態または新しい指示物を導入するものである。本稿では、会話における可能構文の格交替を考察するため、焦点を文の単位から考察するのではなく、会話全体に関わる要素として議論を進める。

また、情報の新旧について、話し手が一般的に聞き手の知識状況を想定しながら発話しているが、会話が動的に進めることによって、情報の新旧状態も変動している。これは、カルバパー&ホー(2014)(椎名 2020:監訳)が指摘しているように、情報の構造化が静的な既知情報の上に組み込まれるのではなく、やりとりの中で造られる動的な二方向的な現象である。このように、発話者はお互いの知識や認識の状況を意識しながら会話を行うわけである。つまり、会話に現れる焦点は発話者の知識に関する認識状態を表している。本稿では、このような焦点を認識焦点と呼ぶことにする。また、ある会話において通常、会話のトピックがあると思われる。その会話のトピックに対して、伝達の重点がある。これを会話焦点と呼ぶことにする<sup>5</sup>。そして、このよう

---

<sup>5</sup> 加藤(2016:59)では、知識焦点と伝達焦点という概念を提案しているが、定義を具体的に規定していない。

な認識焦点や会話焦点は文に反映されており、文焦点の形として出現すると考える。

## 5. 格パターンの使用及び選択条件

可能構文は、動詞述語を可能形式にすることによって構成されるものである。(10)は他動詞文であり、元々の格パターンは「ガ-ヲ」である。(12)は自動詞述語文であるが、移動の場所を表すため、「ガ-ヲ」も見られる。可能形式を用いることで、動作主の意志を表す動詞述語文は動作主の属性叙述文となる。動詞述語文は本来の動作性が弱るとともに、状態性が強くなっている。このように、格交替が生じるわけである。5節では、各格標示の使用特徴を踏まえて、本来動詞述語文が持っている「ガ-ヲ」パターンから可能構文の格パターンと情報構造との関係を分析する。

- (10) 太郎がフランス語を話す。
- (11) 太郎がフランス語を話せる。
- (12) 太郎がマラソンを走る。
- (13) 太郎がマラソンを走れる。

### 5.1 「ガ-ヲ」パターン

(14) の会話において、「フランス語を話せる人」は談話のトピックである。(14B)の発話者はこのトピックについて、自分が持っている知識を活性化し、思考内において「山田さん」の存在を思い出すことから(14B1)を発したと思われる。この場合のガ格は発話者の認識における既知の人物を標示している。さらに、(14B)の発話者は「山田さんという人物はAの知っている人」と想定しているため、(14B)を回答していた。ただし、「山田さん」はAにとって既知の情報としても、「その山田さん」の属性である「フランス語を話す能力があること」は未知である。また、(14A1)の疑問文に対して、日常生活において、B1'よりB1のような回答が多いであろう。「フランス語を話せる」という部分が省略できる点からもわかるように、「山田さん」の部分は文の焦点となる。この文焦点はガ格で標示されており、A1の発話者にとって新情報があり、会話の焦点にも解釈できる。そして、(14A2)では、その会話焦点の機能を保持しながら、(14A1)の知識を更新している。すなわち、ガ格は話し手Aの既知情報に関する認識焦点を標示しているものの、聞き手Bにとって会話焦点の機能も担っている。

- (14) A1 : フランス語を話せる人がいますか。  
B1 : 山田さんが話せます／できますよ。  
B1' : 山田さんがフランス語を話せますよ。  
A2 : そうですか、山田さんがフランス語を話せるんだ。じゃ、山田さんに聞いてみます。

それでは、「ガーヲ」パターンは(14)のように、質問の応答として出現するしかできないのであろうか。答えは否である。(15)を見てみよう。(15A1)の発話場面を考えると、話し手Aは以前から「山田さんがフランス語を話せる」という情報を持っているが、実際に確認したことがないと推定できる。(15)は「山田さんがフランス語を話す現場」を目撃した後の発話として成立するのであろう。この際、話し手の記憶の中の知識が確定されており、情報は擬似既知から既知へ切り替えた。このように、ガ格は発話者の認識焦点を標示している。

(15) A1: 山田さんが本当にフランス語を話せますね。

B1: え? 何

A2: いや、この間、山田さんがフランス語を話せることを聞いたけど、まさか本当に話せるんだ。

これらの「ガーヲ」パターンを確認すると、主に2種類のものがある。まずは、(14)のように、会話の文脈によって話し手が自分が持っている旧情報を聞き手に伝達し、ガ格は聞き手にとって新情報を標示している。この新情報は、会話焦点であり、文焦点の形として現れた。また、ガ格は発話者の認識焦点を標示しており、知識の更新または活性化をしている。

## 5.2 「ガーガ」パターン

「ガーヲ」パターンの次に「ガーガ」パターンについて検討する。5.1で挙げていた「フランス語を話せる人がいますか」のような疑問文に対して、確定できない状況があり、周りの人または質問した人に対して、(16A)の発話が想定できる。(16A)にある山田さんに関する情報は文焦点の性質があるものの、(16A)の発話者がこの情報について完全に確定できず擬似既知の状態にある。したがって、以上の(15A1)で示していることと同様にガ格は認識焦点を標示している。そして、このような不確定な擬似既知な情報に対する回答である(16B)に「ガーガ」パターンが出現し得る。(16B)を見てみると、「山田さんが話せるのは中国語であり、フランス語ではない」のような分裂文に入れ替えられる。そのため、(16B)では文の焦点は「中国語」という情報である。そこで、動作対象を標示するガ格は同時に文の焦点に解釈できる。動作主「山田さん」を標示するガ格は(16A)の認識焦点を引き継いでいると考える。すなわち、1つの文において同じ種類の焦点が存在し得ない。したがって、(16A)の「ガーヲ」パターンから「ガーガ」パターンに交替するには、「文焦点+認識焦点ガ格→認識焦点ガ格」、「非焦点ヲ格→文焦点ガ格」というプロセスがある。

(16) A: 山田さんがフランス語を話せるよね。

B: いやいや、山田さんが中国語が話せるけど、フランス語を話せないよ。

(17) 私が、その日に見た景色が一番忘れられない。



菊地 (2010) は形容詞・名詞<sup>6</sup>の二重ガ格文について、「ガ」は、その述語(句)の叙述内容が帰属する名詞句(いわば帰属元)を表示すると述べている。可能構文の「ガーガ」パターンも同様に解釈できるであろう。例えば、(17)では、「一番」との共起からもわかるように、可能構文は動詞述語文の性質を担いながら、形容詞述語文の性質も持っている。動作主体の属性は叙述内容となり、ガ格が標示する名詞句は帰属元である。このように、動作主体を標示するガ格は認識焦点を標示している。そして、後者のガ格は発話者の知識を活性化し、文焦点の標示として働いている。

### 5.3 「ニ-ガ」パターン

「ニ-ガ」パターンは、「太郎にフランス語が話せる」のような肯定文に用いる際に自然とは言えないが、次に示しているように、否定的な陳述文において自然となる。3節では二格の用法を確認した際に、能力の持ち主や対比の場合において二格が用いられると述べた。また、ある動作を実現する動作主体の集合というものは潜在的に存在するため、その集合体において特定の動作主は二格で標示できる。すなわち、二格は対比の機能を帯びるため、焦点と解釈される可能性が高い。では、具体的な例を通して、二格の特徴は「ニ-ガ」パターンにどのような影響を与えているのかを確認する。

(18) 本当? 山田さんにフランス語が話せるなんて思ってもなかった。

(19) 太郎に良いアイデアが出せないことは皆が知っている。

(20) この子に専門書が読めるはずがない。(=(8))

(18)は、5.1で挙げていた「山田さんがフランス語を話せるよ」という発話の続きとして出現できる。(18)は、発話者が「山田さんにフランス語を話す能力がない。山田さんにとってフランス語を話せるのは難しい」ということを思っていると説明できる。(19)と(20)も、動作主に○○能力がないため○○動作を実現するのは難しいという意味を表している。つまり、「○○能力がないため○○動作を実現するのは難しい」というのは動作主の属性として解釈できており、二格もいわゆる帰属元の標示となり得る。さらに、(18)-(20)の例において、動作主である「山田さん」「太郎」や「この子」といった人物の存在は発話者にとってすでに既知の情報である。これらの既知の情報を述べる際に、二格は帰属元かつ認識焦点を標示している。そして、(18)-(20)にあるガ格で標示される「フランス語」「良いアイデア」「専門書」などの情報は否定の操作によって、対比性が生じた。上記では、二格が焦点になり得ると述べていた。このように1つの文では、2種類の対比が生じるわけである。すなわち、二格は能力の持ち主の集合における対比であり、ガ格は帰属元に属する能力の集合にある対比である。後者は従来で言われてきた総記のガ、つまり文の焦点あるいは会話焦点と解釈

---

<sup>6</sup> 菊地 (2010) では、難易文における目的語の標示であるガーラ交替について少し触れたが、可能構文について議論していない。

できる。一方、二格は発話者に関する認識焦点を標示していると考えられる。

以上で述べてきたように、「ニ-ガ」パターンは、2種類の焦点の拮抗作用によって成り立っている。そして、否定は対比の意味を帯びやすいため、否定文と共起すると自然となると思われる。

#### 5.4 格パターン交替順序

可能構文におけるガ格、二格、ヲ格及びそれぞれの格パターンの使用状況を踏まえて、格パターンの特徴を次の表1にまとめることができる。

表1. 可能構文における格パターンの特徴

①ガ-ヲ	文焦点・認識焦点ガ+対象標示ヲ
②ガ-ガ	認識焦点ガ+文焦点ガ
③ニ-ガ	認識焦点ニ+文焦点ガ

しかし、「ニ-ガ」は「ニ-ヲ」から直接変化するのか、または「ガ-ガ」を経て成立するのかについて説明が必要である。「ニ-ガ」パターンにおいて、二格は能力の持ち主、いわゆる叙述内容の帰属元であり、認識焦点を標示している。形式上「ガ-ヲ」から直接的に「ニ-ガ」に交替しても、「ガ-ヲ」にあるガ格は認識焦点のガ格である。また、「ニ-ガ」のガ格は文焦点という点から、「ニ-ガ」は「ガ-ヲ」から「ガ-ガ」パターンを経て成立しているとは本稿では考える。

### 6. 「ニ-ヲ」パターンの成立条件

先行研究では、「ニ-ヲ」パターンの不適切さは主格保持の原則に違反するのに帰因しているとしているが、本稿は、情報構造上の要因もあると考える。「ニ-ヲ」パターンはもし成立できるのであれば、二格は動作主体の間の対比によって焦点性を帯びるが、ヲ格もガ格相当の焦点性を持つ必要があると想定できる。しかし、ヲ格はプロソディ的卓立を頼らずにガ格のような強い焦点になりにくい。そのため、「ニ-ヲ」パターンの使用に大きい違和感を感じると思われる。

石田・田川(2018)は容認度の高い「ニ-ヲ」パターンの可能構文として、以下のような例を挙げている。また、これらの成立条件には対照的な文脈が必要なこと(McGloin(1980)、Nagatomo and Nakagawa(1984)、長友(1986))や与格主語に対照的な含意を保証する特定の助詞や特定の構文へ埋め込みすること(長友(1986))などがあると述べている。

- (21) a. ほくにはサマンサが求めるものを与えてあげられない。  
b. ほくには君を助けてやれない。(石田・田川2018:24)
- (22) a. \*太郎にこのパソコンを直せる。

b. ?太郎にはこのパソコンを直せるなんて思ってもみなかった。

(石田・田川 2018 : 25)

この2つの例を見てみると、(21)は可能形式を授受表現に付属させるものであり、(22)は埋め込みの操作によって成立するものである。さらに、これらの例は、単なる「ニ-ヲ」ではなく、「ニハ」を用いている。このように、「ニ-ヲ」パターンは単独で成立しにくく、他の形式の力が必要としていることがわかる。例えば、(21)では、授受表現の可能形式は動詞述語を支配する力が弱まっており、ヲ格は可能形式ではなく、動詞述語によって選択されるわけである。

また、対照的な文脈という条件は「ニ-ヲ」パターンのみならず、ガ格を文脈焦点と解釈する際にも必要とされる。したがって、本稿では対照的文脈を情報構造にある焦点に関わる要素と考えるため、「ニ-ヲ」パターンに関する特別条件ではなく、可能構文の格交替の条件の1つとして捉える。

そして、埋め込み文において「ニ-ヲ」パターンの容認度が上がる原因について確認する。情報のステータスの観点からみると、ニ格は認識の焦点であり、ヲは文の焦点に解釈にくい。しかし、(22b)の発話場面を考えると、「このパソコンを」のところにプロソディ的卓立を置くことが多いであろう。さらに、「なんて」の部分は発話者の意外な気持ちを表すことに加え、「ニ-ヲ」パターンが持っている対比性が高くなる。このように、「ニ-ヲ」パターンの容認度が上がると考える。

## 7. おわりに

本稿では、「ガ格」「ニ格」「ヲ格」それぞれ本来の用法を踏まえて、情報ステータスを標示する機能に着目し、情報構造の観点から可能構文の格交替を考察してきた。考察の結果、「ガ-ヲ」パターンでは、ガ格は話し手が持っている既知の知識を活性化し、話し手の認識焦点を標示している。また、この情報は聞き手にとっては新情報であり、文焦点に解釈できて、さらに知識の更新機能を持っている。「ガ-ヲ」から「ガ-ガ」に交替する場合、前者のガ格は文焦点と認識焦点の標示から、認識焦点の標示となり、後者のガ格は文焦点の標示となる。また、「ガ-ガ」から「ニ-ガ」へ交替する場合、「認識の焦点+文焦点」という機能を保っているが、ニ格の焦点性は動作主体の対比から生じており、ガ格の焦点性は動作主体が持っている能力の間におけるものである。さらに、「ニ-ヲ」パターンについて、ヲ格はガ格のように文脈によって焦点になりやすいため、この情報構造上の欠落も「ニ-ヲ」パターンの不適切の理由の1つであることを指摘した。

可能構文は、動作主あるいは動作対象の属性を叙述するものとして、「ハ」で標示する場合が多い(益岡 2008 など)。本稿では格パターンを中心に議論しており、「ハ」について論じる余裕がなかった。加藤(2019)が指摘しているように、「ハ」は談話記憶に活性化された情報として導入される用法を有している。この「ハ」の用法と本稿で挙げている「ガ」の用法との違いを論じる必要がある。さらに、ニ格標示は「ハ」に

なる場合、単純に主題化として説明できるか否かを再考察しなければならない。これらは今後の課題にしたい。

## 参考文献

- 青木ひろみ (2008) 「可能表現の対象格標示「ガ」と「ヲ」の交替」『世界の日本語教育』18、133-146
- 石田尊・田川拓海 (2018) 「他動詞可能文における例外的パターンの出現」『日本語文法』18-1、20-28
- 尾上圭介 (2004) 「主語と述語をめぐる文法」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』尾上圭介 (編) 北原保雄 (監修) 朝倉書店
- 加藤重広 (2013) 『日本語統語特性論』北海道大学出版会
- 加藤重広 (2016) 「日本語の情報構造と語用論的選好」『情報科学と言語研究』加藤重広・佐藤知巳 (編) 現代図書 43-64
- 加藤重広 (2019) 「日本語副助詞と世界知識」『語用論研究』19、13-37
- 菊地康人 (2010) 「日本語の2種類の「文構成原理」と、「が」の「文構成原理上の機能」」『日本語研究の12章』上野善道 (監修) 明治書院 117-133
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1、1-262  
大阪大学文学部
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 長友和彦 (1986) 「文法と談話文法—日本語の与格主語可能文を中心に—」『白馬夏季言語学会論文集』創刊号、1-16 白馬夏季言語学会
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語2』くろしお出版
- Culpeper, Jonathan and Haugh, Michael (2014) *Pragmatics and the English language*. London: Palgrave Macmillan (椎名監訳 (2020) 『新しい語用論の世界—英語からのアプローチ』 研究社)
- Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representation of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McGloin, Naomi Hanaoka (1980) *Ga/Ni Conversion Re-examined* Journal of Japanese Linguistics 7, 65-77
- Nagatomo, Kazuhiko and Nakagawa, Yukiko (1984) *NP-ni Vi-Potential in Japanese* 「神戸大学教育学部研究集録」72、59-65 神戸大学教育学部
- (り) な・北海道大学大学院博士後期課程)